

## シンポジウム3

## 大坂の蘭学における大坂の除痘館の

役割——現地調査をした分苗所を中心に

古 西 義 磨

橋本まちかど博物館

嘉永二年に牛痘苗が長崎にもたらされて、牛痘種痘が日本でも広く普及することとなった。幕末洋学において、この牛痘種痘法は最もポピュラーで、しかも顕著な洋学の成果であるが、大坂でも嘉永二年十一月から緒方洪庵らが大坂の除痘館を開設し、大坂で種痘を行うと共に、全国各地へ分苗を行った。私はそれら分苗所の一つ一つを全て調査したので、それらを通じて大坂の除痘館が大坂蘭学に果たした役割を考えたいと思う。

大坂の除痘館の特徴は嘉永二年以来、明治初年まで二〇数年間一日も休む事なく種痘を続けた。今一つの

特徴は大坂で種痘を行うと共に近畿、中国、四国、九州を初めとして全国各地に分苗を行ったことである。その分苗所数は一八六カ所を数えた。地域別では近畿七六%、中国一二%、四国・九州八%、関東・中部四%となった。それらの分苗所を調査したところ、所在を確認出来たところは二三三カ所で、全体の七二%にあたる。

全体を通じて感じたことは、大坂の除痘館から分苗を受けているのに、その記録が殆ど残されておらず、いたずらに長崎から分苗を受けたなど近代史家の無責任な記述が目についた。分苗の記録である免状は約一割に当たる一六件二〇名が残されていた。

これらの分苗所の中で公の文献がなく現地調査を中心に行った分苗所について、むしろ興味深い点が見られた。淡路志筑浦の吉田春耕や、播州網干（吉福村）の八木主一郎のように、種痘の確認は取れなかったが、地域医療に貢献したことが伺えた。隠岐の堀部仙国や、播州太尾村の藤田恕助はその墓碑が門人などにより建立されており、地域で医学塾を開きながら地域医療に

携わっていたことを知らされた。播州飾西郡山崎村の福原昇平は幕末と共に明治期にも種痘普及に尽力し、生前に行政からの感謝状、地域の人々からの顕彰碑、没後も墓碑が周辺二〇か村の村々により建立された。播州北条の村田良策は大坂の除痘館へわざわざ種痘術を習いに出掛けて種痘を広めた。

先述したように、牛痘種痘法は最もポピュラーで、しかも顕著な洋学の成果であるが、大坂の除痘館から分苗を受けた医師たちは蘭方医よりも漢方医、あるいは漢蘭折衷派の医師が多かったと思われるが、かれらは種痘を通じて幕末の洋学を受け入れた。

緒方洪庵は近代を準備した人と言われるが、大坂の除痘館の仕事こそは種痘を通じて近代への橋渡しした大変分かりやすい事例として挙げられ、大坂蘭学を考えるうえで欠かすことの出来ないものといえよう。